

小児の肺炎球菌感染症について

◆小児の肺炎球菌感染症とは

肺炎球菌は、のどなどから体に入ります。子どもは、大人とは病状が少し異なり、大人だと肺炎になることが多いのですが、子ども（特に2歳以下）は、脳を包む膜にこの菌がつく細菌性髄膜炎が多くみられます。この菌による髄膜炎は、年間200人くらい発生しており、肺炎は12,000人、この他、重い中耳炎や肺炎、菌血症や敗血症も起こします。細菌性髄膜炎は、死亡率が高く、発症した年齢が小さければ小さいほど予後が悪く、4人に1人は神経麻痺や知能障害などの重篤な後遺症が残る病気です。抗生物質が効きにくい起因菌が増えており、治療が難しいのも問題です。

その他にも、肺炎球菌が原因となる病気として、菌血症（血液内に菌が入り込み、様々な臓器に転移することで髄膜炎などの重篤な病気を引き起こす）や肺炎、中耳炎、副鼻腔炎、骨髓炎、関節炎などになる可能性もあります。

【対象年齢・接種スケジュール】

対象年齢：生後2か月から5歳未満まで

接種スケジュール：接種開始時期によって、接種回数が異なります。

接種開始時の年齢	接種回数	スケジュール
★標準的な接種期間 2か月以上7か月未満	4回	 初回接種：1歳までに27日以上の間隔で3回 追加接種：初回後60日以上あけて、1歳から1歳3か月の間 ★初回2回目が1歳を超えた場合は、3回目は行わない（追加接種は可能）
7か月以上1歳未満	3回	 初回接種：1歳までに27日以上の間隔で2回 追加接種：1歳を超えて初回後60日以上
1歳以上2歳未満	2回	 60日以上の間隔で2回
2歳以上5歳未満	1回	

※ 初回接種は2歳を過ぎたら行わない（追加接種は可能）

【副反応について】

接種後に接種部位の赤くなる（発赤）、腫れる（腫脹）、しこりができる（硬結）、痛みがでる、発熱（37.5℃以上）などです。通常は一時的なもので、数日で消失します。重篤な副反応の報告はされていませんが、心配な点がありましたら接種医にご相談ください。

また、このワクチンは製造の初期段階で、ウシ由来成分を使用していますが、このワクチンによる伝達性海綿状脳症（TSE）伝播のリスクは極めて低いものと考えられています。